

## 合同教会の人びと

小野寺那仁

一年ぶりに見る瑠奈の顔はやつれていて眼光ばかりが鋭く、化粧気が洗い流されたように土気色だと静間（しずま）は感じた。耳に刺したピアスは虫ピンのように小さかったが少し気になる。以前にはしていなかったはずだ。茶色に染めた髪と合わせて彼女の日常が荒んでいるのではなからうかと思った。

英会話のレッスンは終わりに近かった。今日のクラスはビギナークラスなので知っている者はいない。一年前に静間を嵌め込んだ葬儀屋の陽気な男もいなかった。

テキストの一文に静間は目を落とす。

今日、私の夫が失業した。これからは家事をすることになるだろう。

確かに瑠奈はその箇所を説明していたのだが倍速のスイッチを押されたように早口で何を言っているのだから聴き取れない。前回もそうであったが、たとえテキストであっても自分の心に躓きを覚えるような箇所になると聴き取りの困難なほどにスピードがアップする。頭を使っているよりも口が勝手にしゃべっているようでもある。

やがてレッスンが終わったらしくおもむろに瑠奈はテキストを閉じると静間を含めた五人の生徒たちも一斉にテキストを閉じる。

「わからないことはありませんか？」誰も応えない。俯いたままだ。

「ないようですね」わからないことはあるのだがそれを英語に翻訳して質問するにはビギナーには至難だった。

わめきたてるように瑠奈は英単語を速射した。今度は三倍速か五倍速のスピードになった。ネイティブスピーカーでもこうは速くはしゃべらないだろう。さまざまに変化する口唇が嫌でも眼に飛び込んでくる。拡大された濡れた濃い紅に彩られたくちびるはそれ自体が生き物のように思えた。初めはスピードに面食らったが徐々に静間は思い出してきた。

一年以上前にも同じようにレッスンの終わりには個人的な日記のような日々の断想があるいは予定を瑠奈は語っていたのだった。内容はレッスンとは関係のない話だった。

離婚した瑠奈の夫である木島からどんな様子なのか教えてほしいとは告げられていたこともあって初めは必死に聞き取ろうと試みたが途中からはあきらめた。この一年カナダに留学していた瑠奈の会話能力は一層磨きがかかっているようだった。ところどころ聴き取れた単語はチャーチ、クリスマス、パーティなどなど。そこから推測するとどうやらクリスマスパーティーを企画しているのだろうと。そして一年前と同じように生徒たちを誘っているのだろうと静間は考えた。だが「サイケデリック」という言葉がミュージシャンとは繋がらなかった。瑠奈はかつてバンドのリーダーだったのでおかしくないといえればおかしくないのだが。

ところどころ理解できるといえるのはまったく理解できずに関わらない方が無難な場合も

ある。たとえ義務感から、あるいは興味からであっても。セーラー服のまま来た女子学生もスーツの若手社員も作業服の技術者も静間と似たりよったりの対応であったが、静間ほどあけっぴろげて理解できないことを露わにしない。彼らは隠すのが巧みだった。わからないのにわかっているふりをして、そして都合の悪そうなことはやりす(こ)す。

「ミセス？ いや、ミス・ルナ！ パードン」

「何？ いいわよ、日本語でも」

たまりかねた生徒のひとりが言った。静間よりも遙か年上の女子学生の祖父といってもいいくらいの年頃の男だった。

「申し訳ないですが、もう少しゆっくりとお話していただけるとありがたいのですが」

もちろん、これは日本語だ。教室内では日本語は禁止のはずであったが年配者は時々ルルを無視する。瑠奈はむっとした表情に変わった。

「まあ、おわかりにならないから」瑠奈は年配者から視線をはずす。関係のない個人的な事ですから」瑠奈は年配者から視線をはずす。

「でもみなさんほんとうにわからなかったのでしょうか？」

誰も答えない。静間は、そこにいるすべての生徒たちからじっとりと身体のあちこちら汗が滲んでくるような気がした。

「あなたはわかっているわよね。答えて！ ゆっくりと」瑠奈はスーツ姿の女性を指した。

「ええっと、なんとか教会でクリスマスパーティーを行うので来てくれると嬉しいな。

私はミュージシャンで演奏します。私はキーボードで唄います」

「何、その日本語？ 変でしょ。英語で言いなさいよ」

それから彼女は英語で言った、たどたどしい。けれども静間には彼女を批判する資格などはない。彼は首を傾げているばかりだった。彼女の頬は恥ずかしさから真っ赤になっていた。彼女はモデルのように端正な顔立ちであった。肌もきめ細かく一見すると頭脳明晰にもみえるがここでは英語をそつなく使えるかどうかだけがすべてであった。このクラスは初心者なのだから聴き取れなくても仕方なからうにと静間は思っていたが、瑠奈は彼女を聞雲に叱責して病的な興奮状態に陥っているようにも見えた。彼女の困惑を見るにつけ瑠奈は発音が悪いと何度も言い直しを迫るのだった。しまいには彼女は目に涙を浮かべていた。幼子のように。それでも瑠奈は追い打ちをかけた。瑠奈の奇妙に歪んだ顔が性的に興奮しているような表情にも見えた。

「ゼロ歳から五歳までここで習ってたはずよ。日本語の習得の障碍になっただけなの？」

気まずい沈黙が流れた。私たちの誰もが瑠奈を止めることはできなかった。

ああキッズ英会話からの生徒か、静間は理解した。

間が悪かったが、時間は過ぎていたので生徒たちはごそそと帰り支度を始める。残っているのは彼女だけだった。静間も席を離れようとすると瑠奈は両手で制止してきた。それでは残ることにした。木島のこともあったから話してもよかった。ただ何をどう話したらいいものかは整理しなければならなかった。

「United Church は合同教会って翻訳すればいい」その言葉は彼女に向けられてはいるものの生徒全体に対しても聞かせたい言葉であることは瑠奈の表情から窺える。

だがすっかり時間を過ぎてしまっているので生徒たちは聞いていなかった。「グッドナイト」とか「シーユー」とかたどたどしく口にして次々席を立った。瑠奈のクリスマス提案にまるで関心がないかのよう。

瑠奈は帰り支度をしている静間の傍らに歩み寄ってきた。おもむろにオシリの辺りを三本の指を使って肛門を開くようにスーツの上から押し付けてくる。

「来てくれるよね！」とっさのことで静間は声を出しかねた。今度は静間の身体に覆いかぶさるように迫ってきた。息苦しさからうなずきそうになるのを必死にこらえる。ふたりがもつれあっているのを見てチャンスとばかりにさきほどの瑠奈に責められて泣き腫らしていた若い女性がすり抜けて行くのが見えた。耳にかぶりつきそうなほど顔を寄せてくる。吐息が生暖かく、さきほどまでのレッスンのやや生真面目な雰囲気を一気に吹き飛ばしてしまった。ただ静間は独身ではあったがそうした一連の仕草が義務と演技を伴った一種の人妻らしいサービスであることはわかっていたので真に受けることはなかった。もとより別れたとはいえ瑠奈は木島の妻と言う認識は揺らぐことはない。

「あなたのパーティーはロクなことが起きないからなあ」他の生徒がいなくなったこともあって静間は思い切って言う。一年前に同じようにレッスンのあと名目は不明だったがパーティーに誘われた。フェラーリの葬儀屋がいた。瑠奈のバンドのメンバーたちが現われた。それから瑠奈の自宅で飲むことになり旦那の木島も紹介された。静間はぐでんぐでんに酔っぱらっていたがワイングラスが卓子で碎け散る音で目覚めた。眼の前には鬼子と化した瑠奈が喚き散らしていた。あとから思えば自宅に職場の知人や趣味の仲間が押し掛けてくるぐらいで妻を追い出すというのは度を過ぎていただろう。静間が酔いつぶれているうちに瑠奈と仲間たちはいなくなっていた。その時初対面だった木島と静間は仕事の話ばかりしていた。木島はエンジニアだったので信頼を得る、あるいは彼らとは違って巻き込まれただけだという弁解するにはそうせざるをえなかった。

「あいつが変な奴だというのはわかっていただけだね」

開け放たれた高層マンションの窓から強い寒風が入り込む。焚火の匂いがする。木島が、味噌汁を作りながら言った。

「俺達が夕食をともにするのは一ヶ月に何度あるだろうか」

「はじめはそんなでもなかったんだけどね」

「はつきりそうだとは確信できないけど瑠奈は不感症で俺はインポテンツだ」

木島は独り言のようにぼつぼつと打ち明けてくる。ガタイのいい男だった。

「もつともあいつの不感症は俺に対して、俺のインポテンツはあいつに対して」

「木島も連れてくるんだよ」耳もとで呟くには大音量だった。静間の耳たぶはしつとりと唾液で濡れていた。静間は教室のコーナーに追いつめられた。瑠奈は全身の力で覆い被さ

る。身動きが取れない。熱が伝わってくる。狂おしいほどに熱がたぎっていた。

「ちよっと、何するんですか？」

誰かに見られたらヤバイだろうと静間は思う。

「もう離婚したんじゃないの？」

「誰と？」

「木島とに決まってる」

「ああ、なんかあんたと仲良くなったそうね。スキーやそれからプーケットにも行ったそうじゃない」

「連絡は取り合っていたんだ」

「いろいろ書類の手続きとかあるからね。それだけよ」

瑠奈はカナダへ行きそこで教会のシスターになったとこの教室の支配人である春子から聞いていた。それが僅か半年あまりでまた戻ってきたのだ。

「木島君も強がって見たり落ち込んだりと感情の起伏が激しくてね」

「あいつのことだから若い女と遊んでいるのじゃないかと思っていた」

あえて言わなかったが木島はいつでも会社の新入社員をとっかえひっかえスキーに連れてきていた。そこから何かが芽生えるという性質のものではなかった。

「なんで教会から戻って来たんですか？」

「合同教会？ のこと？」

「いえカナダの？」

「ああ、あれも合同教会なのよ」

「意味がわかりませんね」

「カナダの合同教会と提携したのよ。2000年からだけど。シスターになろうかと思っていた時期もあったけどね。私には向いてないわ」

考えてみれば木島とのつきあいは、たかだか一年だが、瑠奈とは通算すると五年ほどは経っているのかもしれない。忘年会やポットラックのパーティーなどで話し込んだことはあるがそこでは木島の話は微塵も出なかった。

「この英会話教室の秘密特訓所というか教師研修センターがカナダにあるの。そこで指導を受けてきたの。去年まではアルバイトだったけどTOEICのスコアが満点になるとネイティブなみのお給料が貰えるから」

そう言われると実もふたもなく現実的な話だった。木島との生活をやめマンションを追われ実家に戻るわけにもいかなかったら、英語ができるのだったら当然の結果ともいえる。

「教師養成センターが廃止になってほどなくして教会でテロが起きたのよ。本当のことなんて誰にもわからないけど、私も日本じゃ考えられないような出来事と思ったけど、起きてしまったから仕方ない」

「テロ？」

「過激派らしき一部が関係してきたのよね」

「それで？」

「さすがにあたしもへこんだ。一日中ボンヤリと窓から見える山肌をみて暮らしていた。そこは初めて行ったんじゃないの。新婚旅行で木島と過ごしたウイスラーの高原なの。そのときも木島はひとりでチャンピオンコースを滑走していたから私はひとりきりだったけどね。やっつけられないわよ。日本の良さがわかったってことかしら」

海外に渡航した日本人が生活慣習の違いや社会情勢の変化から戻ってくることは不思議でもなんでもない。この学校でもロンドン、タイ、チベット、グアム、アメリカ本土、ニュージーランドで政変や自然災害に遭遇した者がいた。比較的安全なのはオーストラリアやカナダであった。

ようやく瑠奈は息を整えて、静間から離れた。

「襲撃された人はね。ギタリストだったの。特に政治や宗教に絡んでいるようには思えなかったけど何か情報を伝えたりしてたんでしょね。後頭部をハンマーで殴られた後に刃物で削り取られて雪の中で倒れていたの。グリズリーにやられたように。大の字にあおむけに寝転んでいた。他の子たちは泣いてばかりで祈るだけだった。あたしは警察が来た後にいろいろ片づけたり捜査を手伝ったりしたの。死体を抱きかかえると十字架のペンダントが雪の上に落ちて自分でもおかしいくらいに絶叫した。涙が止まらなかった。それは人種や国籍に無関係にどこでも共通した感情だったの。ただね、ただ……」瑠奈は言い淀んだ。静間は英単語が渦巻く痺れた頭で考えを巡らせたが、しばらくたつてもいっこうに考えがまとまらず何と返事していいものだろうかと途方に暮れる。正直なところ彼女のエゴイステイックな人生を無理やり垣間見せられることには辟易する気持ちもないではなかったが知らん顔してそのまま通り過ぎるには深入りしすぎていた。

もともとは会社の新製品をタイでプレゼンテーションする可能性が出てきたためにこの英会話教室に通い始めた。ただ英語はいっこうに進歩せずそれが元凶でもないだろうがタイに行く辞令は蜃気楼のように立ち消えになりつつあった。

「なんていうかありきたりだけど味噌スープの味が恋しくなったということかしら」

「いいですよ。行きましょ。クリスマスパーティー！」それでも言わなければここから解放してくれそうにない！ 半ば自棄な感覚だった。くたびれたスーツは静間の内面の表現でもあった。

「ありがとう。じゃあ木島も連れてきてね。日曜日にするからイブの夜じゃないけどね」

「伝えますが、本人が納得するかはわからない」

「場所はM岬の合同教会でね。スーパーマーケットの敷地内だからすぐわかる」

「今までも何度か言われていたところですよね」

「さっきのクラスの人たちは来ないみたいだけど上級クラスはみんな来るよ」

「じゃあ僕たちのクラスは下級なんですか？」

「まあ初心者でしょう。長くやってる人ばかりだけど」

瑠奈先生は教科書を小脇に抱えて天井を眺めるようにして控室に歩いて行った。

「シーユーアゲイン」静間はつぶやいた。

受付でマネジャーの春子が待ち構えていた。彼女はすぐに嫌味を言うのであまり好かれていない。嫌味な事を言うのが知性と勘違いしている損なタイプの女性だった。春子はこの教室が始まって以来のメンバーで瑠奈よりも何歳か年上だ。独身である。

「遅かったじゃない。何をグズグズしているのよ」妙になれなれしい。

「まだ今月分の月謝の引き落としがされてないみたいなんだけど。いま現金で払いますか？」

「あれ？ そうでしたっけ。ちょっと持ち合わせが」静間は財布の中身を改めて確認したが必要な金額の半分にも満たない。

「ないなら次回に持ってきてください」春子は事務的に言った。

「わかりました。すみません。ところで春子さんもクリスマスパーティーに行くのですか？」

「え、瑠奈ちゃんのこと？」

「そうですよ」

「行かないわよ！ 日曜日でも子どもや学生の教室はあるから仕事なのよ。仕事じゃなくても行きませんがね。去年は行ったけどあんなどこ行くもんじゃないわよ。断わりなさいよー」

「ずいぶんひどいじゃないですか！」静間が返事をする間もなく横槍を入れたのは蒼白な顔色ながら愛想の良さそうな青年だった。

「United and uniting churches の悪口に僕は耐えられないです。静間さん、パーティーに行く前にネットで検索したり合同教会のブログをチェックしたりしてください。感動すること間違いないですから！ 僕は神学生です。N大学の院に通っています。瑠奈先生は素晴らしい方ですね。クリスマスパーティーにはぜひ来てくださいね！」青年は静間の手ががっちり握る。

「ちよつと！ 布教活動は困ります。ここは上場企業なんですよ。どうせカルトでしょ。どうみてもカルトの教会じゃないの！ あんたあそこに行ったらびっくりするよー」

「一応、日本基督教団に属してますが反発もしてますね。名前も決められない状態なんです。だから一般名詞である合同教会を固有名で名乗ってます。それに対する批判や中傷もありますけどね。そういうことはインターネットでチェックしていただければよくわかります。あ、僕は高橋侑といいます」

「あんたバイトでしょ。チラシを配ってるだけじゃないの！ もう、でしゃばりなんだから。あんたなんて私の権限ですぐにクビにできるのよ。瑠奈ちゃんもね。とにかく布教活動はやめてほしいです。厳禁です！ いいですか。守れないなら今すぐ辞めてください！」

瑠奈が連れてきたアルバイトの青年のようだった。

静間は居心地が悪くなって結晶のはりついたガラスの扉を開けた。みぞれ交じりの冷たい猛烈な風が吹き込んでくる。樹木を彩るイリュミネーションが点灯して、クリスマスに近いことを物語っていたが、恋人や子どもでもない限りは無縁のイベントだった。どこ

かから第九交響曲の合唱部分も聞こえてくるような気がしたが、それは静間の幻聴だったかもしれない。かつてはその場所で聖夜の数日前から短大の合唱部が練習していたのだ。今は廃墟のようながらんどうのビルであったが。静間は振り返り英会話教室を眺める。

「シーユー、アゲイン」

(連載一回分)